教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三一・三四五二 芦屋市船戸町12—6

聖ペトロと聖パウロ

聖なる使徒たちを通して偉大なみわざをなしとげられた主をたたえ、感謝しよう

「あらゆる時に、主を祝せよ、
主への賛美はいつも私の口にある。」
（詩篇34(33)・1）

この詩篇の言葉をもって、使徒聖ペトロと聖パウロの大祝日に、ローマの大聖堂でささげる聖体祭儀にあずかっておられるみなさんにご挨拶いたします。

幸いなるローマよ、あまたの使徒たちの貴い血に染められたローマよ……。

ローマよ、見よ、耳を傾けよ！　十九世紀を経た今、ここでまた、歌いつがれた歌が響きわたる。ガリラヤのペトロとタルソのパウロ、使徒たちのかしらである二人がともに歌い、それぞれ詩篇の言葉を繰り返す。

「あらゆる時に、主を祝せよ、
主への賛美はいつも私の口にある。」

全教会が歌う今日、この賛歌を使って二人の使徒とともに、賛美と感謝をささげます。

天の御父が使徒たちを通してなされた偉大なみ業について、今一度黙想してみましょう。

フィリッポのカイザリア地方で、ペトロはイエズスの口から次のような言葉を聞きました。「シモン・バルヨナ、あなたは幸いな人だ。その啓示は血肉からのものではなくて、天にまします父から出たものである。」（マテオ16・17）

天の御父がペトロにおいて成就なさったことがらを述べているこの言葉を、ペトロはローマに来るよりずっと以前に耳にしていました。御父はペトロに、人の子であるキリストの秘義を公に告白する力をお与えになったのです。「あなたはキリスト、生ける神のみ子です」（マテオ16・16）と。

イエズスがたずね、ペトロが答える。聖ペトロは全ての人を代表して答えました。事実、キリストは私たちみなにお問いかけになったのです。「ところで、あなたたちは私をだれだと思うのか。」（マテオ16・15）　そこでペトロがひとり答えます。イエズスはその答えを聞き、神から与えられた賜をおほめになりました。神からの隠れたたまものは、ペトロの言葉の中で信仰告白として実ったのです。キリストはペトロのいわおのような信仰をほめ、その岩の上に教会をお建てになりました。そして、ペトロを「いわお」と呼ばれるのです。

ガリラヤの漁師の素朴な心に岩のような信仰をお与えになった神をたたえましょう！

「ごらん、彼の魂は主において誇る、
小さな者はそれを聞いて喜ぶ。」
（詩篇34(33)・3参照）

これはペトロがローマへ赴くよりずっと以前のことですが、ローマ行きは遅かれ早かれやってくるはずでした。

いま聖マテオが記すカイザリアでの出来事を読んだところですが、今度は使徒行録に書かれているあの夜のことを読んでみましょう。

ペトロは、フィリッポのカイザリア地方ですごした日々のことを覚えていたように、あの夜のことをいつも思い出していました。

あの夜、天使の働きでペトロに起こったことが現実であったとは思っていませんでした。ゆめを見ているのではないかと考えていたのです。（使徒行録12・9参照）

実際、彼はヘロデによって牢につながれ、四人組の兵四組に守られており、過ぎ越し祭が終われば死刑の宣告を受けることになっていましたから。

天使に導かれるままに第一、第二の番所をすぎ、町にはいる鉄の門につくと、門があき、彼らがそこを出てある通りを進んでいたとき、やっとペトロはわれにかえって言いました。

「私はいまこそ、主がほんとうに天使をおくり、ヘロデの手から、またユダヤ人の待っていたことから私を救い出してくださったのだと知った。」（使徒行録12・11）

イエルサレムでペトロの命を救ってくださった神を今日ここでたたえましょう。「私が主を求めたとき、主は答えられ、私は心痛から助け出された。」（詩篇34(33)・5）

イエルサレムでの死の恐怖からペトロを救い出し、ローマに来て、ここに教会を創設するのを可能にしてくださった神を賛えましょう。

使徒聖ペトロと聖パウロを使い、その全生涯にわたる全ての活動を通して、世界のため、そしてローマのために仕えさせられた、神のすべてのみ業に感謝しましょう。

「主はそばにあって私を強めてくださった。それは私によって宣教が全うされ、すべての異邦人にそれを聞かせるためであった。」（ティモテオ②4・17）と使徒聖パウロはしるしています。

使徒聖ペトロと聖パウロが、ネロの時代にこのローマで最終的な勝利をおさめたことを本日神に感謝しましょう。

使徒たちはこの市に、この教会に、みずからの血による封印を与えました。それは彼らの殉教のしるしであり、死の証でした。

「私がそそぎのいけにえとしてそそがれ、帆を張って去るべき時はもう近づいた。私はよい戦いをたたかい、走るべき道のりを走りつくし、信仰を守った。すでに私のために正義の冠がそなえられている。かの日に、正しい審判者である主はそれを私にくださるであろう。」（ティモテオ②4・6～8）

「かの日」のために本日神に感謝しましょう。ローマ教会の典礼において毎年六月二十九日に更新される日、それが今日という日なのです。神に感謝しましょう。「主にとこしえの栄えあれ。」（ティモテオ②4・18）

（一九八二・六・二十九）

「ところであなたたちは私を誰と思うか。」ペトロは全人類を代表して答えます。「あなたは生ける神の子キリストです。」

勉学ー聖化すべき仕事

最も大切な勉学、最も大切な仕事とは、

恒例の集いのときがやってきました。今日の大会では「仕事としての勉学」がテーマとして選ばれたようです。

世界各国の大学から来られた学生や教授であるみなさんに、私の心からのよろこびを伝えると共に、「よろこびの源」である聖母マリアに信頼の心で、みなさんの希望の取りつぎを願っていることも知っていただきたいと思います。全きキリスト者、とりわけ若いみなさんはよろこびにみちた日々を送らなければならないからです。

勉学は仕事であると言えるでしょうか。「仕事」と「勉学」それぞれの深い意味を理解できれば、勉強は仕事であるとたしかに言い得ると思います。仕事にも勉学にも、人文的な意味と宗教的な意味の両方があるのです。

厳密に勉学とは何かと問えば、まず、知性を使う仕事、つまり、真理を知り、真理を伝える仕事であると答えられるでしょう。仕事をするとき、一定の方法と規律に従わねばならず、疲労がともなうという面を考えれば、勉強は確かに仕事です。みなさんにとって、知性の謙遜で忍耐強く、組織だった働きはいかにも大切なことです。事実、キリストのみ教えにあるように、真理を得ると、自由も手に入れることができます。しかも、それは本ものの自由のことであって、人格と徳、聖性の完成を意味するのです。

また、勉学は知性の働きであるだけでなく、意志の働きでもあります。知性を使って真理を追求すると言っても、とくに倫理に関する真理を求めるのであれば、知性だけが単独で目的を達することはできません。どうしても意志の働きに支えられていなければならないのです。真理を愛さなければ、真理をみつけることはできません。ところで、愛するとは意志の行為です。それだけでなく、福音の真理のように高度な真理をまちがいなく親しく知ろうとすれば、愛徳という超自然の愛も必要になります。愛徳こそ、無限の真理なる神を真に知るための唯一の道であるからです。

「意志」とは「責任」のことです。勉学というものを、論理性のみを尊重する技術的知的プロセスであると考えてはなりません。勉学と意志とが密接な関係にあるのなら、勉学は倫理的な意味でも仕事であると考えるべきです。勉学に従事することによって、知的な徳のみならず、倫理的な徳をも育てなければなりません。勉学と人間の善との間にも密接な関係があるということなのです。勉学とは責任ある行為ですから、真の善を求める責任があることを強調しておかなければなりません。こうしてみると、勉学は非常に深い意味で仕事であると言えます。抽象的な知識を得るためだけでなく、人間を永遠の目的地に向かわせるという点で決定的な働きをしているからです。

大勢の方々の指摘によると、現代の学生諸君は真剣な態度で勉学に励むことに関心をもち喜びを感じているようです。しかし同時に、ほんとうの価値基準をもたずに勉学に没頭するというのが一般的な傾向であるようです。みなさんのお友だちは大勢、専門職として勉学に励んでおられるようですが、実用的な考え方に従って、つまり、自己主張のみを目的としてそうしておられる。知は力である、という皮肉なスローガンを繰り返しているように思われます。

勉学を職業としての面から考えると、たしかに仕事であると言えます。ところで勉学を職業化するとき、それが物質主義の結果や表現となってしまわないように、注意しなければなりません。(『働くことについて』13参照)物質主義では、人間自身が自他の野心を遂げるための道具になってしまうのです。私たちは繰り返し「仕事は奉仕」であると主張しなければなりません。自分自身と自分の仕事を最高善(神)に奉仕する(役立つ)ためによろこんでささげるわけですから、このようなことを一個人のはかなくも影のごとき力に肩代わりさせることなどできないのです。

従って、「勉学は仕事である」というとき、人間として、ひいてはキリスト者として円熟の域に達するための仕事を意味すると考えるべきでしょう。

最も大切な仕事とは、世を変えることではなく、私たち自身を変えること、つまり、創造主が私たちの本性に刻み込んでくださった神の似姿に、日ごと近づくことなのです。最新の精密技術を使って自然を支配できたところで、万一、神法に照らされ良心の導き手にみずからを従わせることができないとすれば、何の役にも立ちません。そうなると、主の問いかけが心に迫ってきます。「よし全世界をもうけても、自分の命を失えばそれが何の役にたとう。」(マルコ8・36)

仕事の意義はキリスト教的な生き方に照らしてみて初めて明らかになります。疲れの意味を理解しようと思えば、すべてにおいて全力をあげて善なる神につかえよ、という神の召しだしが何であるかを理解しなければなりません。仕事の目的は人間であり、人間の目的は神です。それゆえ、仕事の意義は仕事自体を超えるものであり、仕事自体を自由にするということになります。

ここまで考えると、勉学と仕事の深い意味が明らかになってきます。いずれも聖性を求めることを目的としているのです。みなさんは大学でキリストの証人になるという大きな仕事をしているわけですが、それを一言で表わすとすれば、聖性ということになります。仕事において聖性を求め、仕事を通して聖性を求める。仕事の世界にとって、みなさんの聖なる生き方がぜひとも必要なのです。ところで聖なる生活の中味は、教えと祈り、キリストとの親しさと仕事、つまり神への愛ゆえに生きることです。では、こういう生き方の動機とは何でしょうか。みなさんがよくご存知のことばを引用しましょう。「自然的召しだしや職業的召しだしは、神から与えられる超自然の召しだしの重要な一部分なのです。重要であるからこそ、自己の仕事や環境を聖化することによって自己の聖性を求めるのみでなく、同時に聖化に貢献しなければならないのです。つまり、毎日の生活の大部分を占めるだけでなく、この世に生を営むものの特長となるべき仕事や任務、さらに、家族や家庭、そして自分が愛する祖国を聖化しなければならないのです。」

仕事とは、神と人々を愛する能力のこと、被造物を思いやる創造主のご計画に協力する

最も大切な仕事は自分を変えること、つまり創造主が本性に刻み込んでくださった神の似姿に、日毎近づくことです。

説教・講話・書簡等の抄訳

努力のことです。罪は人間のわざをけがし、活動の場を乱して対立と衝突の場に変えてしまいます。キリスト信者が仕事の世界で役に立とうと思えば、霊魂に巣食い、神への愛の障害となる罪に対して戦いをいどまなければなりません。ここで、「悔悛と内的変革への努力」(教皇令『アペリーテ・ポルタス』4)をぜひ思いだしていただきたい。贖いの聖年にあたり全信者に向けたことばです。このことばの中に、世界を変えることのできる偉大な力がひそんでいることをよく考えてほしいと思います。

聖年にあたって悔悛を呼びかけると言っても、それは悲しみの声ではなく、よろこびの声です。悲しみのうちにキリストのご受難を黙想するが、赦しを得て生まれかわるよろこびへの招きであるからです。キリスト教の聖性とは、欠点やあやまちのない状態を指すのではなく、負けないように戦い、罪を犯してしまったときにはすぐに立ち返ることを言います。また、聖性は意志力の問題ではなく、霊魂内で働く恩寵の邪魔をしないこと、というよりどちらかと言えば、謙遜な「協力者」になることです。これこそ、最も大切な勉学であり、最も大切な仕事であります。

贖いの聖年にあたり、私は「特別に祝う通常の聖年」(教皇令『アペリーテ・ポルタス』3)ということばを使いました。本日私はみなさんに、日常の仕事を特別な仕方で、すなわち、できるだけ真剣に、とくに、日々一層の愛をこめて果たし、忠実の実りをもたらせてくださいとお願いします。こうしてみなさんの生き方を清めれば、つねに光に照らされることができるのです。「あけの明星」聖母マリアが日々みなさんの努力を照らし導き、みなさんが御子に従い、また、すべてを御子に導くことのできるよう助けてくださるでしょう。

みなさんに心からの祝福を送ります。

(一九八三・三・二十九)

真理と愛の力

人間が人間性を百パーセント生きるには、……

さて、「あなたたちがキリストとともによみがえったのなら、上のことを求めよ。」(コロサイ3・1)

キリストが御父からお受けになった使命の中心をなすのは、新しい人、つまり、御父に心を開いた人となることです。ところで、「御父に心を開いた人」とは、人間性を百パーセント生きる人のことです。また、「上のことを求めよ」という命令は、人間構造そのものに記されていますが、人間が人間性を百パーセント生きるには、真理と愛の力で自己を「克服する」場合だけに限られています。私たちが聖霊を受けるのはそのためであって、聖霊がお与えになる真理と愛の力のおかげで私たちの内的生活はかたちをなし、また外に向かって輝くことができるのです。同時にこういう人間を形成することが第一の仕事、私たち一人ひとりにとっていちばん大切な使命なのです。それゆえ、上から与えられ、上に向かわせる賜(たまもの)には、自分からすすんで応える、つまり、私たち一人ひとりが協力しなければなりません。

この第一の仕事ができれば次の仕事へすすむことができます。真理と愛の力によるこのような人間形成がなされたあとでのみ、世の中を「変える」仕事をおしすすめねばなりません。個人のレベルから、共同体のレベルへと移っていくべきなのです。御父に心を開き、聖霊によって人間形成されたキリスト者にとって、世界を変えるということは、与えられた賜を使って、自分のおかれた境遇や自分の属する共同体全体を、責任をもって高め、また豊かにすることです。まず第一に自分の家族、それから友人たち、学校環境、仕事の場、教養の分野、社会生活、市民生活などがこの仕事の対象になってきます。たしかにきつく、難しい仕事ではありますが、若者にはできます。(…)

ここに集う若いみなさん方も、この仕事に召されています。自分自身と世界とを変えるべく、聖霊の賜が与えられているのです。

実際、司教様方に思い出していただいた特質、つまり、国独特の文化・政治・経済面の強調、それから、忠誠、誠実さ、約束や言葉に対する忠実さ、家族の聖性、勤勉さ、貧しい人々に対する心の寛大さ……といったキリスト教的価値などを尊重することは客観的にみて貴重な遺産であり、たしかにみなさん方が備えておられるものです。それらは今も昔も変わらず、親のもつ特質であり、遺伝と言ってもいいくらいごく自然に、子孫へと受け継がれてきています。

聖霊の賜を受けて豊かにされ、聖霊に従う生活をして、この世の変革に寄与しなければなりません。ところで、先に述べたような特質を備えているならば、実は、この世を変革する義務に最も積極的に応えているということになるのです。

真理の力

「聖霊を受けよ。」こうおおせになったすぐあとで、キリストが罪の赦しについてお話しになったのはなぜでしょうか。「あなたたちが罪を赦す人にはその罪が赦され、あなたたちが罪をゆるさない人はゆるされない」と、キリストはおおせになりました。

罪の赦しを得るには、まず罪に気づき、ついで罪を告白しなければなりません。罪に気づくことも告白することも、真理と愛のうちに生きる努力のことです。また、それらは「真理と愛の力」の働きでもあり、これによって新しい人が生まれ、この世も変わるのです。

真理をゆがめたり、愛するふりをして実は愛していないのであれば、自己矛盾におちいります。「罪」をヒューマニズムと称する人がいますが、善と悪の区別がつかなくなっているわけで、これでは大変なことになります。残念ながら、このような例をあげるのはいとも簡単です。例えば、今日、テロリズムは、当然、人間の基本権を侵害するものとして、また、殺人は明らかに人間の存在そのものに反することとして非難されます。しかし一方では、まだ生まれていない人間の生命を奪うことが「ヒューマニズム」であるとか、進歩の証拠だとか称され、果ては人間の尊さにふさわしい解放であるとまで考えられているのです。(私は人を責めているのではありません。ただ、私の苦しみをわかってもらいたいだけなのです。)

ごまかされないでください。愛する若者諸君、決して忘れないでください。上にのべたような矛盾に対しては警戒と非難の態度をすてず、矛盾をうち破らなければならないのです。「真理はあなたたちを自由なものとする」(ヨハネ8・32)ことを決して忘れないでください。本ものの進歩と真の「ヒューマニズム」を実現するために世界を変えることができるのは、真理に生きるときだけなのです。真理、良心、人間の尊さなどを、単に「政治的」な選択であるなどとは言わないでください。いずれも人間にもっとも必要なものです。絶対に、放棄するわけにはいかないのです。

(一九八二・四・十八)

不変の教え

苦しみのうちに現存

本日、この聖堂はみなさん方で一杯であります。司教様が、病に苦しむ司祭方、シスター方、その他の病に伏す大勢の方々を紹介してくださいました。このカテドラルは、今日、文字通りみなさん方で埋めつくされています。ところで、ここはいつもみなさん方で一杯になっていると申し上げたいのです。みなさん方はここにおいでになっているが、全く特別な方法で臨席していらっしゃる。病に伏すみなさん方はおそらく誰よりもすぐれた仕方でカテドラルにおいでになると言えるでしょう。みなさんは十字架につけられたキリストのすぐ近くに場をしめておられるからです。これは秘義の一つであると言うべきです。人となられた神のみことば、御子の謙遜と十字架上のはりつけという方法で私たちの救いをお望みになった神の秘義なのです。数多くの男女や兄弟姉妹がこの十字架に共にあずかっておられること、これも秘義であります。そうとしか言いようがありません。本日、この大聖堂は物理的にみなさん方で一杯になっていますが、それだけでなく神秘的な仕方によってもみなさんで一杯です。この大聖堂は、全く特別の方法で、みなさん方が建てたと言えるのです。なぜかと言えば、みなさんは後継ぎ、それもキリストの御苦しみの特権をもった後継ぎ、主の十字架の相続人だからです。

聖堂の中を通って来るとき、通路の近くの方々と握手致しました。すると、その方々の手を通して、握手は他の方々へと伝わって行きました。これは意味深長なしるしです。みなさんと一つであることを示したく思い、私は両手をさし出したのです。これまで以上にみなさんと一つになりたいという私の心からの願いを示すためでした。私は、苦しんでいる方々と一体になることを強く望んでおります。みなさんの苦しみこそ私の力であるからです。私の力はキリストの十字架からくる力であり、キリストの十字架はみなさん方の苦しみの中にあるからです。

私はみなさん方全員を抱きしめたい、みなさんの一人ひとりを抱きしめたいと思います。できることなら一人ひとりのお近くにいて、みなさんの祈りと犠牲の力をお借りしたい。私自身と全教会、それに世界全体をみなさんの祈りと犠牲にゆだねたいのです。世界は大きな危険、かつてなかったような大きな危険に見舞われていますから、今まで以上に十字架とあがないが必要です。そういうわけで、私は教会と世界をみなさん方にゆだね、教会とこの世に仕える義務をもつ私自身、司教自身、教皇自身を、みなさん方にお任せするのです。

最後に、病に伏す人々を助けてくださっている大勢の方々に申し上げたいと思います。この善きサマリア人の心がけを示し続けてくださっていることにありがとうと申し上げます。感謝の心でいっぱいです。私はただ一言、これからもどうかお続けくださいとだけ申し上げます。

さてみなさん、「主の祈り」を歌って私たちの信仰を表わしましょう。そのあとで、ここにおいでの司教様方と一緒に、教皇祝福をさし上げたいと思います。　（一九八二・八）

人間の労働

人間の仕事にはもう一つ切り離せない面があって、ここにも福音に基づく霊性が浸透します。肉体的であろうと知的であろうと働くことには必然的に労苦が結びついています。創世の書はこのことを意味深いことばで言い表わしています。創造の神秘にもともと含まれていて、人間が神にかたどられたものとして高められることに含まれる、働くことへの祝福は、罪がもたらした呪いとは対立しています。「おまえのゆえに、地はのろわれる。生きつづけるかぎり、おまえは苦労して、地から糧をえる。」(3・17)　働くことと結びついた苦痛は地上の人間の生活の特徴で、死の予告を含みます。「おまえは、額に汗を流して糧をえる。土から取られたおまえは土に帰るまで……。」(3・19)　これらのことばのこだまのように知恵文学の中の一つの著者は言います。「私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、すべてがむなしい。」(伝道の書2・11)　これらのことばを自分にあてはめてみることのできない人はいないでしょう。

愛するみなさん

福音はまたこのことについても最後のことばを言っているともいえるでしょう。それはイエズスの復活秘義の中でのことです。人間の仕事の霊性にとって特にたいせつな諸問題への回答はここに求めなくてはなりません。復活秘義はキリストの十字架と、死に至る従順とを含むものであり、使徒パウロはこれを、はじめから地上の人間の歴史に重くかかる不従順と対比しています。(ローマ5・19参照)　復活秘義はキリストの高揚をも含むもので、キリストは十字架の死を経て、聖霊の力とともに復活のうちに弟子たちへと戻られます。

汗と労苦は人類の現状では仕事につきものですが、キリスト者、そしてキリストのあとについていくように呼ばれているすべての人にも、キリストが成し遂げられにこられた働き(ヨハネ17・4参照)に愛をもって加わるおりを提供しています。キリストの救いの仕事は苦しみと十字架上の死を通して実現されました。私たち人間のために十字架に掛けられたキリストとの一致のうちに仕事の労苦を耐えることで、人間は人類のあがないのために、神の子キリストといわば協力するものです。毎日自分の十字架を担うことで（ルカ9・23参照）キリストの真の弟子の姿を身をもって示すのも、自分が果たすように求められている活動のことです。

キリストは「罪人であるわれわれのために死を甘んじて受け、自分の模範によって、肉と世が平和と正義を求める人々の肩に負わせる十字架を、われわれも担うべきであることを教える。」　それだけでなく、「復活によって主に立てられ、天と地における全権を与えられたキリストは、ご自分の霊の力をもって人びとの心の中にすでに働いている。キリストは、生活をいっそう人間らしいものにし、地上全体をこの目的に従わせようと努力する人類家族の心をこめた願いを力づけ、清め、強める。」(『現代世界憲章』38)

キリスト者は人間の働くことの中にキリストの十字架の小さい部分を見出し、キリストが人々のためにご自分の十字架を引き受けてくださるのと同じあがないの精神でこれを引き受けます。キリストの復活から届く光のおかげで、働くことの中に、いつも新しいいのち、新しい善いものの幾分かの光を「新しい天と新しい地」(ペトロ②3・13と黙示録21・1参照)の告知でもあるかのように見出します。そこへと、人間と世界とはまさに働くことに伴う労苦を通して参加するものです。労苦を通してであって、労苦なしにでは決してありません。このことは一方で人間らしく働くことの霊性のなかで十字架が欠くことのできないものであることを確認もし、他方では、あらゆる側面を考えに入れて深い意味で受け取った働くことからであって、決して働くことと切り離してのことではありません。(『働くことについて』27　沢田和夫訳中央協議会発行)

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393